

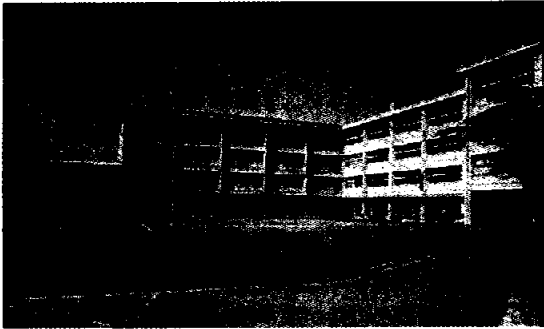
〔施設紹介〕

筑波大学附属盲学校

大 内 進・牟田口 辰 己

1. 本校の沿革

本校は1880（明治13）年、楽善会訓盲院として開設された（創立記念日は、訓盲院設立のための御内幣金 が下賜された1876（明治9）年12月22日としている）。1884年には訓盲院と改称され、1885年に文部省直轄となった。1887年文部省の告示により校名が東京盲啞学校と改められ、1891年に小石川指ヶ谷町の新校舎に移転した。その後、盲・聾教育の分離により、東京盲学校と改称された。1910年に、現在地の小石川区雑司ヶ谷（文京区目白台）の新校舎に移転した。第二次世界大戦後、東京教育大学に附置され、同附属盲学校と改称されることになった。その後、1978（昭和53）年に筑波大学に移行し、筑波大学附属盲学校と改称され、現在に至っている。



2. 設置されている課程

現在、本校には、幼稚部（年少・年長）、小学部（盲学級・弱視学級・特別学級）、中学部（盲学級・弱視学級）、高等部（普通科、音楽科）、高等部専攻科（理療科、理学療法科、音楽科、保健理療科〈研修課程〉）が設置されている。

3. 各教科の教育目標と特徴

本校は、視覚に障害を持つ幼児・児童・生徒に対して、障害を克服し、人間として調和のとれた発達を図り、積極的に社会に参加・貢献することのできる人間

を育成することを教育の目的としている。

そのために、幼児・児童・生徒が保有する感覚を有効に活用し、個人の自主性と個性を尊重して、社会生活における自主的な思考力・判断力ならびに積極的な行動力を養い、主体的に社会に参加していくための知識・技能・習慣を養うことを基本方針とし、教育活動が展開されている。

幼稚部は、一般の幼稚園と同じ目標のもとに、心身ともに健康な幼児を育成することをめざしている。近年、日常の保育の他に、地域の保育園・幼稚園に通う視覚障害幼児の指導や視覚以外にも障害を合わせ持つ幼児に対する早期教育にも力を入れている。

小学部は、やはり一般の小学校と同じ目標のもとに、心身ともに健康な児童を育成することをめざしており、全盲児と弱視児それぞれに適した教育活動を行っている。全国的に盲学校では、少人数化、多様化の傾向が顕著であり、本校小学部でも、児童数の減少化傾向がみられる。多様化傾向に対応して、特別学級を設置し、重複障害児教育も行っている。また、近年、視覚に障害を持ちながら、普通小学校に在籍する児童も増えてきているが、様々な問題を抱えている事例も多い。こうした実態をふまえて、教育相談の一環として、一般小学校に在籍する視覚障害児童を対象に、通級指導の試みも行っている。

中学部は、中学校と同じ目標のもとに、有能な社会の形成者を育成することをめざしている。進路は本校高等部および他の盲学校へ進学するものがほとんどであるが、弱視生徒を中心に、一般の高校へ進学するものもある。

高等部には、普通科と音楽科が設置されている。普通科は、高等学校と同じ目標のもとに、広い視野に立った有能な社会の育成者を育成することをめざしている。卒業生の多くが一般大学への進学を希望しており、近年専攻科に進み、理療・理学療法の道への希望者が減少してきている。音楽科は、音楽高等学校とおなじ目標のもとに、心身の発達に応じて高等学校普通教育および音楽の専門教育を行っている。主として、ピアノ・箏・三弦・声楽・管楽器・バイオリン・作曲など

の知識と技能の習得をめざしている。

高等部専攻科理療科および保健理療科（研修課程）は、理療（はり・灸・あんま・マッサージ）に関する知識と技術を習熟させ、国民保健に寄与することのできる理療専門技術者を養成することを目標としている。卒業生および修了生には、あんまマッサージ指圧師・はり師・灸師の資格試験の受験資格が与えられる。これらの国家試験の合格率は高く、理療科教員養成施設に進学を希望する生徒も多い。

高等部専攻科理学療法科は、昭和39年に設置され、視覚障害者を対象に、理学療法に関する知識と技術を習熟させ、医学的リハビリテーションの専門技術者（理学療法士）を養成することを目的としている。

高等部専攻科音楽科は、高等学校および高等部音楽科の教育の基礎の上に、個々の生徒が専門とする分野を重点的に習得する課程である。主として音楽に関する専門家を養成することをめざしている。コースは、邦楽コースと洋楽コースに分かれ、邦楽では、山田流および生田流の箏曲、洋楽では、ピアノ・声楽・管楽器などを指導している。卒業生は、さらに音楽大学に進学したり、教授所経営、作曲、演奏などの分野で活動したりしている。

4. 幼児・児童・生徒

1995年4月現在で、幼稚部13名。小学部23名。中学部31名。高等部普通科61名。高等部音楽科9名。高等部専攻科理療科45名。音楽科5名。理学療法科28名。保健理療科10名の幼児・児童・生徒が在籍している。

出身地は、幼小小学部が通学可能な首都圏に限定されているのに対して、中学部以上は全国から募集している。従って出身地は沖縄から北海道まで広範囲にわたっており、地方出身者の多くは、学校敷地内の寄宿舎で生活している。また、専攻科理療科には海外からの留学生が4名在籍している。

5. 職員構成

校長(1)、教頭(2)、教諭(80)、養護教諭(1)、司書教諭(1)、寮母(15)、事務関係職員より構成されている。

6. 施設・設備

敷地面積が12,688㎡。校舎は4階建てで、延べ面積7,923㎡である。盲学校特有の教室として、養護・訓練室、養護・訓練ADL室、視力測定室、資料室、剝製室、

音楽科レッスン室、音楽料アンサンブル室、治療室、コンピュータ室、実技室・解剖学教室・運動療法室・物理療法室・義肢加工室など理療科および理学療法科に関わる特別教室などがある。

これらのうち、養護・訓練室では、盲児童生徒のための触覚および聴覚教材、低視力の弱視児童生徒が視覚を活用できるよう配慮した拡大教材や光学補助具を準備している。資料室には、わが国の視覚障害教育成立以降の貴重な資料（点字以前の訓盲点字、点字に関する内外の資料、点字筆記具、視覚障害教育にかかわる教具、内外の視覚障害関係文献）が保管されている。剝製室には、生きている状態では観察が難しかったり、日常生活では触れることが難しかったりする哺乳類、鳥類などの剝製が保管されている。治療室は、理療科の生徒の臨床実習の場である。理療科生は、専門教官の指導により、外来患者対象に鍼・灸などの施術を実習し、実践をつんでいる。コンピュータ室には、実験用のコンピュータと関連の機器類が配備されており、コンピュータを介しての点字入出力をおこなったり、音声を紹介したり、画面拡大したりして、一般のソフトウェア情報の活用を図ったりするための指導が行われている。ちなみに、本校は文部省・通産省の100校プロジェクトの1校に選ばれ、インターネットの活用を推進中である。音楽科に関わる教室には、防音設備が施されている。

校舎の他に、体育館、プール、寄宿舎などの施設がある。寄宿舎は現在改修中で、本年度中に完成の予定である。

7. 本校の今後の課題

全国の盲学校はさまざまな問題をかかえている。たとえば、児童・生徒の少人数化・多様化（とくに重度・重複化）、社会の統合教育志向の流れ、専攻科課程の高等教育機関化の問題などをあげることができる。本校は、唯一の国立の盲学校として、これらの問題に積極的に対処していくことが求められており、現在、将来計画について検討を進めている。まだ、協議中であり、ここで詳細に述べることはできないが、視覚障害教育のセンターとしての役割を中心に、広く視覚障害教育に関するサービスを展開して行くことを模索している。また、専攻科課程は、一般の養成学校がほとんど高等教育機関化されており、その高等教育機関化への道を模索しているところである。